# 『幻を追う人』読解のこころみ (6)

井　上　三　朗

目　　次

1．はじめに
2．欲望の世界
**3．死の魅惑と恐怖**
(1)　マリー＝テレーズの死の想念
(2)　プラス夫人の不幸への愛と死への歩み
**(3)　マニュエルの死の想念と恐怖**
(4)　死の城の住人たち
(5)　まとめ
4．結び

（太字は今回掲載分）[70]

## 3．死の魅惑と恐怖

### (3)　マニュエルの死の想念と恐怖

#### a．マニュエルの病いの悪化

次に、マニュエルが『在り得たこと』を作成するに至るまでの、彼の死の想念についてしらべることにしよう。マニュエルの死の想念は彼の胸の病いの悪化とともに生じることになる。そこでまず、マニュエルの病いの進行状況をまとめておくことにしたい。マニュエルは、マリー＝テレーズを夜の散歩に連れ出した翌日から病いにたおれ、二週間、高熱のために床につく。この病いは、マニュエルが病弱にもかかわらず、肉体の誘惑に身をさらしたことに起因している。すでにみたように、夜の散歩の際、マニュエルは純粋志向をもつがゆえに、マリー＝テレーズへの欲望に支配されつつも、この欲望とたたかわねばならなかった。欲望とたたかうこと、それは苦しみの体験であり、当然のことながら、精神的な疲弊だけでなく肉体的な衰弱をもまねく。マリー＝テレーズは、「彼［マニュエル］といっしょに屋敷跡に行くのではなく、わたしが自分の部屋にとどまっていたら、彼は病気になっただろうか。わたしは無知であったけ

れども、自分がこの男を、ほとんど彼の力の限度以上に試みてしまったことを漠然と理解していた」（Ⅰ－10、p.253）と書いている。夜の散歩はマニュエルにとって、自分の体力の限界を越えた試練の機会であったのである。

マニュエルの病いは、マリー＝テレーズがガロ神父との約束どおり[71]、夜の散歩のことをプラス夫人に打ち明けた日に悪化する。この日、マリー＝テレーズが母親と二人きりで話しているあいだ、料理女のレオンティーヌはマニュエルに、過日の夜、マリー＝テレーズといっしょに外出するところを目撃したと伝え、次のように言っている。

「(…) あの時、あなたはすでに熱がおありになったのですよ。さもなければ、真夜中にお嬢さまと外出なされたりはされなかったでしょう。でもお嬢さまはあなたのあとについて行くべきじゃなかった。これは理にかなったことではありません。マニュエルさま、あなたのほうは熱がおありになったのだから、話が別でございますよ。もし奥様にたずねられたら、そうお答えになればよろしい。何も思い出せないということもあり得るでしょう」（Ⅱ－1、p.264）。

レオンティーヌはマニュエルに、プラス夫人から夜の散歩のことを訊かれたときの対応を教唆することによって、マニュエルを窮地から救おうとしている。とはいえ、ここで重要なことは、レオンティーヌがマニュエルをたすけようとしているという点じたいではない。そうではなく、夜の散歩の事実が、プラス夫人から問いただされる前に、すでに秘密ではなくなっているということを、マニュエルが否応なく知らされるという点が大事なのである。レオンティーヌの存在、あるいはレオンティーヌによる秘密の暴露は、マニュエルの内心に宿る良心の呵責と照応し、罪悪感をつのらせる役割をはたしているように思われる。

マニュエルの有罪性の意識はこのあと、プラス夫人からたずねられたとき、徹頭徹尾しらばくれることによっていやますことになる。マニュエルは、「本当なのかい？」（Ⅱ－1、p.266）と問うプラス夫人にたいして、まず理解できないふりをし、それから、体の調子がよくないことを示すために、「偽善的な、しかしよく計算された仕草」（p.266）で、ハンカチを口のところへもっていったりする。そして真夜中に屋敷跡へマリー＝テレーズと行ったかどうか訊かれると、マニュエルは驚いたふりをして首を横に振り、否認するのである。プラス夫人は、マリー＝テレーズが嘘をついたと思いこんで、はげしい怒りに身をゆだねる。娘のからだを揺さぶりながら、娘の偽善的な宗教を非難し、毒づく言葉を吐きつづける。この間、マニュエルは終始、沈黙をまもっている。

「《一言でも口をきけば、ぼくはもう駄目だ。一言でも口をきけば、白状してしまう。》祈りのように繰り返していたこの言葉は、ぼくを支えてくれた。ぼくは、じっとしたままでいられる力と、口を開かないでいるための力とをその言葉から汲みとるのだった」(II－1、p.268)。

マニュエルは嘘をつき、そしてまた、沈黙をまもることによって窮地を脱する。ところで、上の引用文の、「一言でも口をきけば、ぼくはもう駄目だ。一言でも口をきけば、白状してしまう」に対応する原文、《Si je dis un mot, je me perds; si je dis un mot, j'avoue.》には少し注意を払うべきである。まず、主節・結果節がje me perdrai、j'avouerai といった単純未来形ではなく、je me perds、j'avoueといったように現在形で語られていることが目をひく。主節の内容は未来のことであり、単純未来形で表現することも可能であるのに、現在形が使われている。それはなぜか。それは〈もう駄目だ〉〈白状する〉という事行が、絶対確実なこととして認識されているからだと思われる。単純未来形は推量の意味をもち[72]、その分だけ確実性が弱まるのである。そして事行の確実性を保証する現在形の使用から、マニュエルが危機的な状況に置かれていることを十二分に承知していることがうかがえる。また、《Si je *disais* un mot, je me *perdrais*; si je *disais* un mot, j'*avouerais*.》というように条件節が直説法半過去、主節・結果節が条件法現在で言われていないことも、一考を要する。未来の仮定を直説法半過去で言う場合は、仮定された事行、ここでは〈一言でも口をきく〉という行為の実現可能性が低いときである。そういうことはおそらくないけれども、もしそういうことがあればといった意味あいをもたせて、仮定の文をたてるときに、直説法半過去を用いるのである。これにたいして、条件節に直説法現在を使う場合、仮定の事行の実現可能性は半過去の場合よりも高い。とすれば、Si je *dis* un mot,...というような直説法現在の使用は、マニュエルが「一言でも口をきく」という行為を実現可能なこととして認識していることをほのめかしている。さらに言えば、マニュエルが真相告白の衝動にかられていることを示唆しているのではないだろうか。マニュエルは一方では沈黙をまもることで危機をのがれようとこころみながらも、他方では、良心の呵責にかられて真実を語りたいという欲求にとらえられていると考えられるのである。したがって、プラス夫人に嘘をつき、夫人がマリー＝テレーズに怒りをぶちまけているところを目のあたりにしながらも、沈黙をまもるといった欺瞞的な態度は、ますますマニュエルに有罪性の意識をつのらせる結果となる。事実、マニュエルは、マリー＝テレーズと夜の散歩に出かけたこ

とをプラス夫人に否認する直前の心の動きを、次のようにかえりみている。

「ぼくは、(…) 自分が犯しつつあるあやまちが、おそらくぼくの将来全体を拘束するものであることを理解した」(Ⅱ－1、p.266)。

マニュエルはプラス夫人を前にしての欺瞞的なふるまいを、自分の残りの人生を左右しかねない「あやまち」(faute) と認識している。ここから、マニュエルの鮮烈な有罪性の意識を読みとることができる。このような有罪性の意識ないし良心の呵責は、言うまでもなく精神的な苦悩を意味し、精神的な苦悩は当然、マニュエルのひよわなからだにも影響をおよぼし、肉体的な衰弱をもたらす。マニュエルは、プラス夫人が娘のからだを荒々しく揺さぶりながら、怒りの言葉をぶちまける場面をふりかえって、「この場面のはげしさがぼくを病気にしつつあった。そのとき、ぼくは伯母の心をなだめるために、まさに話そうと、何でもよいから口にしようとしていたと思う」(Ⅱ－1、p.267) と書いている。この文章から、マニュエルが真相告白の欲求にかりたてられているという点とともに、「この場面のはげしさがぼくを病気にしつつあった」とあるように、良心の呵責あるいは有罪性の意識が病いの悪化を招来していることが確認される。また、このあと、プラス夫人はマリー＝テレーズにたいして、マニュエルにあやまるよう命じる。マニュエルが自分のほうに歩みよってくるマリー＝テレーズの脚に魅せられ、有罪感をいだきながらも、「悪しき欲望」にとらえられることはすでに述べた。この欲望もまた、マニュエルに苦しみを与えるがゆえに、彼の肉体的衰弱を助長する。第二部第一章のおわりの部分、マリー＝テレーズがマニュエルに謝罪するところを読むことにしよう。

「――わたしのせいじゃないのよ、マニュエル。告解のとき、告白しなければならなかったの。すべてのことをママに言う義務を負わせられたの。

――もっと大きな声で！　とプラス夫人が言った。

――ごめんなさい、マニュエル。

ぼくは立ち上がろうとして身動きした。もしそうすることができたならば、ぼくは大声で叫んだだろう。そのときぼくの腕をとって、ぼくがベッドの上に身を横たえるのを手伝ってくれたのは、伯母だったと思う」(pp.268-269)。

マニュエルは、マリー＝テレーズがあやまったあと、ベッドに身を横たえている。プラス夫人に欺瞞的な態度をとったことと、マリー＝テレーズに欲望をいだいたことで、マニュエルは疲労し、消耗するのである。マニュエルは人に助けられてベッドに横たわる。しかも「伯母だったと思う」という言い方からわかるように、助けてくれた人が誰であるのかを定かに記憶していない。これ

らの事実は、マニュエルの疲労・消耗の度合いが極限状態にまで達していること、彼が肉体的に完全に衰弱していることを明示している。

こののち、マニュエルは病いの床につき、夜の散歩の一件はうやむやになる[73]。五日か六日後、マニュエルの体力は恢復する。勤め先の本屋の主(あるじ)であるエルネスト氏の催促もあって、マニュエルは勤めに出る。けれども、第二部第三章で述べられているように、時折店にやってくる、エルネスト氏の妹のマドモアゼル・ベルトから医者に診察してもらうようすすめられる。マニュエルは、マドモアゼル・ベルトが紹介したブラール医師のところへ行く。医師は六カ月間の一切の労働を禁じる。そこでマニュエルはエルネスト氏の店での勤めをやめ、闘病生活にはいる。数週間が平穏のうちに過ぎ、病状は快方に向かう。そして外出できるほどまでに体力をとりもどしたころ[74]、マニュエルはマリー＝テレーズと、家に遊びにきた彼女の友だちのポーリーヌとエドメ・ド・ガイヤルデとを連れて、ラ・コンブの森に散歩に出かけるのである。

森の散歩が、欲望の体験であると同時に欲望とのたたかいの体験でもあるがゆえに、マニュエルの健康状態をそこねることは言を俟たない。問題は、このあとの人びとの反応である。森で目隠し鬼ごっこをしている折、マニュエルからからだにさわられたエドメは逃げ帰り、通りで出会ったサンクティス神父に自分のうけた仕打ちを打ち明ける。サンクティス神父は早速、プラス夫人の家をおとずれ、森の中でのマニュエルのふるまいを非難する。プラス夫人は神父の話を信じようとしない。サンクティス神父は、「あなたの甥御さんの品行については色々な噂が流れていることはあなたも御存知でしょう」（Ⅱ－５、p.299）と言う。おそらく神父は夜の散歩のことをほのめかしているのであろう[75]。しかしプラス夫人はとりあわない。サンクティス神父は、「あの子［エドメ］が話すでしょう、奥さん」（p.299）と言い残して、プラス夫人の家をあとにするのである。

サンクティス神父がやってきた同じ日、プラス夫人の亡き夫の旧友である羅紗商人のジョルジュ・エスパンシャ氏も、マニュエルに仕事を世話するために、夫人の家を訪ねていた。サンクティス神父と夫人とのやりとりを聞いていたエスパンシャ氏は、プラス夫人とマニュエルに向かって、こう言っている。

「私の考えでは、(…) 彼［マニュエル］にとっていちばんよいのは、少し町から遠ざかることでしょうな。或る種のことがらに忘却の覆いをかけるには、数カ月留守にするだけで充分です。ねえ君、まったく思いがけない偶然によって、私には君に提供できる仕事がある、私のところでね[76]」（Ⅱ－５、p.303）。

エスパンシャ氏はマニュエルに、スキャンダルのもみ消しのためにも、自分のところで働くようすすめている。けれども、マニュエルはこの誘いをことわる。プラス夫人もまた、マニュエルに同調し、「出て行ってください」(p.304)と命令する。エスパンシャ氏は怒りの中で、「正直な人間を侮辱するとどうなるかっていうことを、あなた方は知られることになるでしょうよ」(p.304)と威嚇して立ち去るのである。

このように、マニュエルとプラス夫人は、サンクティス神父だけではなく、ジョルジュ・エスパンシャ氏をも敵にまわすことになる。エスパンシャ氏はマニュエルにとって、「世間の象徴」(Ⅱ－5、p.301)であり、この二人の人物と敵対することは、世間の人びとと敵対することに等しい。これは、夜の散歩の一件と同様、ラ・コンブの森でのふるまいが人びとの顰蹙を買い、憤慨の対象となることを意味する。前述のように、夜の散歩の一件がマリー＝テレーズの口からプラス夫人に伝えられたとき、有罪感と相俟って、マニュエルは病いにたおれた。世間の人びとの敵視の自覚は、マニュエルに蟄居生活を余儀なくさせるとともに、有罪性の意識を増長させ、心理的にも肉体的にも彼を追いつめ、衰弱させることになるのではないだろうか。サンクティス神父およびエスパンシャ氏とのやりとりの場面のあと、作品はまもなく『在り得たこと』に移行する。それゆえ、マニュエルの病いの悪化の具体的な記述はない。けれども現実生活において追いつめられたマニュエルが衰弱し、もはや生の方向ではなく、ひたすら死への方向にしか歩むことができなくなることは容易に推察されるのである。

b．マニュエルの死の想念と恐怖

マニュエルの病いの悪化の過程を簡単にたどってきた。こんどは、この過程で生じるはずの死への意識、さらには、死の恐怖をみていくことにしよう。マニュエルの死の想念は、第一部第十章、夜の散歩に出かけた翌日、すなわち、病いの床につく直前に芽生えているように思われる。体の具合が悪いため、いつもより早くエルネスト氏の店から帰ったマニュエルは夕方、マリー＝テレーズと次のような会話をかわしている。

「――どこにいるの？　と彼はだしぬけに訊いた。

――誰のこと、マニュエル？

――善良な乳母のことさ。

わたしは、彼が冗談を言っているのだと思おうとした。そして笑い出した。しかし彼はいら立ちながら同じ問いを繰りかえした。もしドアのそばにいたら、わたしは逃げ出して

いただろう。だが彼はわたしの道をふさいでいた。わたしは、彼が譫言を言っているのだと理解し、恐れの気持ちを抑えようと努力した。

——芝生を散歩しているわよ、とわたしは口ごもりながら言った。

錯乱した目で彼は、《芝生には見えないよ》とつぶやいた」(Ⅰ－10、p.249)。

マニュエルは〈乳母〉のことを話題にしている。いったい、彼の言う「善良な乳母」(la bonne nourrice) とは誰のことなのであろうか。まず思いうかぶのは、プラス夫人である。プラス夫人はマニュエルの面倒をみているという点で、見方によれば、マニュエルの乳母の役割を果たしているとうけとれるからだ。しかしながら、マニュエルが「譫言を言っている」[77]ような印象をマリー＝テレーズがいだいていることからわかるように、また、「錯乱した目で」という表現が示すように、マニュエルが錯乱状態にあることを考えると、〈乳母〉がプラス夫人を指すという解釈は無理があるように思われる。ジャック・プチはこの〈乳母〉のイマージュにふれて、「このイマージュは死のイマージュだ」[78] と言い、『在り得たこと』に登場するジョルジュ夫人は、この〈乳母〉の延長上にある人物だとみなしている。のちに論じるごとく、ジョルジュ夫人は死を体現した人物であるので、〈乳母〉の延長上にジョルジュ夫人が位置するのであれば、この〈乳母〉もまた、死のイマージュを有することになる。また、ジャック・プチは、ここでの〈乳母〉のイマージュを、『レヴィアタン』の中の次の一節に出てくる〈母親〉のイマージュと重ねあわせて考えている。

「重要なものは時間だった。しかも時間は人間の掌中にはないのだ。何日か、あるいは何年かすれば、彼の運命は決まってしまうだろう。彼の事件は裁かれ、結末は明らかなものになるだろう。彼は、時間のたつのも知らないで遊んでいる子どものようであり、母親から寝かせる瞬間を準備され、自分の周りに、眠りにつかせるための暗闇を作る瞬間を準備される子どものようであった」[79]。

この一節を解釈するまえに、少し脈絡を説明しておこう。ここで言われている「彼」とは主人公ゲレのことである。ゲレは、洗濯屋で働くアンジェールにはげしい愛の情熱をいだく。そのアンジェールが、食堂をいとなむロンド夫人の客たちを相手に、売春婦まがいのことをしていると聞き知って、ゲレは嫉妬と怒りの感情におそわれ、アンジェールの顔を木の枝で鞭打ち、血で顔がみえなくなるほどまでに傷つけてしまう。さらに、通りですれちがった老人を、自分の犯罪が露見するのをおそれて、老人の持っていたステッキを用いてなぐり殺してしまう。こうしてゲレは逃亡生活を余儀なくされる。上の引用文は、ゲレが国外に脱出しようともくろんでいるときの心の動きをえがいたものである。

さいごの文で、ゲレが「子ども」(un enfant) にたとえられ、その「子ども」を寝かせ、周囲を暗くして眠らせる「母親」(la mère) がもんだいにされている。では、この〈母親〉は何を象徴するのであろうか。まず考えられるのは、「何日か、あるいは何年かすれば、彼の運命は決まってしまうだろう。彼の事件は裁かれ、結末は明らかなものになるだろう」という文章が前に置かれていることから、つまり逃亡できるか、逮捕されるか、ゲレが自問していることから、〈母親〉が、ゲレの意志ではどうにもならない運命、ゲレを支配する運命じたいを表徴するのではないか、という点である。あるいは〈母親〉とは、ゲレの人生をつかさどる神のごとき存在であるとみなすこともできる。けれども初めに、「重要なものは時間だった。しかも時間は人間の掌中にはないのだ」という文があることから、別の見方をすることも可能である。ゲレは流れ去る時間に思いをはせている。この時間意識とのかかわりで、さいごの文をとらえるならば、〈母親〉は、有限の時間しかもたない人生の終わりに待ちうけるもの、すなわち死を表象するとうけとれるのである。ジャック・プチはおそらくこのように解したうえで、先の引用文の中の〈乳母〉とここでの〈母親〉とを重ねあわせて考えるのであろう。とはいえ、この〈母親〉は前述のように、別の解釈も成り立たせるので、マニュエルの口にする〈乳母〉が死のイマージュを有することの決定的な証拠を提供していない。もし他の作品から援用するのであれば、『幻を追う人』が刊行されてから二年九カ月後に書きはじめられた小説『悪人』(*Le Malfaiteur*、1955、完全版1973) の冒頭の、次の件りをひき合いに出さなければならないだろう。

「結局、さいごには必ずやってくるのだ、日が暮れて目の前が暗くなり、おもちゃがもう楽しくなくなったころ、遊び飽きた子どもたちを家に連れ帰る女が。貪欲な愛情をいだいて私たちに気を配る女、黒いヴェールで顔を覆った年老いた乳母が」[80]。

まず、この文章で、「年老いた乳母」(la vieille nourrice) というかたちで〈乳母〉が出てきていることを確認しておきたい。次に、文脈を説明しておこう。『悪人』は二人の中心人物ジャンとエドウィージュの孤立化と孤独の深化の過程を主として語っているのであるが、上の一文はジャンの孤立化と孤独の深化とかかわっている。ジャンは〈悪人〉すなわち同性愛者であり、同性愛の性向を有することで、痛切な孤独意識にさいなまれている。そこでジャンは告白の文章をしたためることで孤独感から逃れようとする。作品は、眠られぬ夜を明かしたジャンが自室の机にむかい、自己表白の欲求をいだいてペンをとるところを描くことからはじまる。ジャンは過ぎ去った日々に思いをはせながら

文を綴ろうとする。しかし、長い夢想のはてにようやく書きはじめられた頁は、今までと同様にひき裂かれる。ジャンは告白の衝動にかられてペンをとりつつも、黙っていたほうがよいと考えて、告白のくわだてを放棄するのだ。そして告白のこころみに挫折し、沈黙の中に閉じこもったジャンの心の動きを示すものとして、上の引用文が作品のプロローグの終わりにみいだされるのである。さて、ここで言われている〈乳母〉とは何なのか。この〈乳母〉はその顔を覆う「黒いヴェール」が喚起する不吉なイマージュによって、明らかに死と結びついている。夕陽が沈み、暗闇が支配しはじめたころ、〈乳母〉に連れられて家路につく「子どもたち」は、束の間のささやかな幸福をあじわったあとこの世を去るみじめな人間たちを表象しているように思われる。とすれば、〈乳母〉が人生の終わりに人を葬り去る〈死〉を象徴していることはまぎれもない。こうして、上の記述は、死に魅せられ、死のほうに傾いていくジャンの孤独な内的風景をかいまみせているといえよう。

『幻を追う人』のなかでマニュエルが口にする〈乳母〉もまた、ここでの〈乳母〉と同じイマージュを有し、死を表徴していると考えることができる。マニュエルの言う〈乳母〉は「善良な」と形容されているものの、人生の終わりに自分を迎えにくるもの、あるいは、自分の人生を終わらせるもの、すなわち〈死〉であることには変わりがないと思われる。とすれば、マニュエルは夜の散歩の翌日、はじめて病いの床につく直前に自らの死を意識したことになる。死の想念はマニュエルにおいて、病いの悪化とともに生じているのである。

マニュエルの死の想念は、彼がマドモアゼル・ベルトの勧めにしたがって、ブラール医師のところに診察をうけに行ったときにもみられる。マニュエルはこのときのことを、こう回想している。

「診察室に入ったとき、ぼくは医師のした質問が理解できないほどに、おどおどとしていた。医師は頭の禿げた大柄の老人で、少し背が曲がり、時代遅れのフロックコートを着ていた。彼は人のよい微笑をうかべ、昔治療をしたことのあるぼくの父親の話をした。ぼくは、死者がその言葉とともに部屋に入ってきて、ぼくたちと一緒になり、背中を曲げ、気づかわしげに、エルネスト氏に贈るための子兎のテリーヌを小脇にかかえているのをみるような奇妙な印象をいだいた」（Ⅱ－３、p.281）。

マニュエルは、「死者」が診察室の中に「入ってき」たような印象をうけている。この印象はもちろん、ブラール医師がマニュエルの亡き父親の話をしたことから生じている。だが同時に、マニュエルが自らの死を意識しているからこそいだかれるのだと思われる。また、「ぼくは（…）おどおどとしていた」

(je me sentis intimidé) と語っているように、マニュエルは怖じ気づいている。intimider という動詞は、もともと〈内気な〉とか〈臆病な〉を意味する形容詞timideから派生した語であり、語源を考慮すると、マニュエルの恐れは、対人恐怖、性格の内気さに関係しているとみることができる。しかし、intimider の第一の語義は、*Petit Robert*によれば、《Remplir (qqn) de peur en imposant sa force、son autorité》(自分の力、権威を押しつけることによって人を恐怖の念で満たすこと)であり、類義語としてeffrayer(おびえさせる)やterroriser(恐れおののかせる)といった動詞が挙げられている。intimider という動詞は、直接目的補語になる人の性格の内気さ、臆病さとは関係なしに、〈恐怖をいだかせる〉という意味で使われることがありうるのである。マニュエルが〈恐怖をいだかせ〉られるのは、言うまでもなく医師のブラールによってである。ではなぜ医師なのか。それは、医師が患者に、いわば生か死かの判決をくだしうる存在であるからではないだろうか。医師は、無罪を言いわたすこともできるし、刑をあるいは刑の執行猶予を決定することもできるし、さらには、死刑を宣告することもできる裁判官のごとき存在なのである。マニュエルの恐怖は、このような医師の役割を視野に入れて考察する必要があるだろう。要するにそれは、死の恐怖が混入したものとうけとれるのである。マニュエルは、ブラールの診察をうけているときをふりかえって、「ぼくの心臓はどきどきしていた。ぼくは怖かったのだ」(p.281)と述べている。ここでの恐怖は、医師とはじめて顔をあわしたときのものではなく、診察中のものであるのだから、明らかに死へのおののきを意味する。では今度は、診察が終わったあとの、マニュエルの反応をみてみることにしよう。

「ぼくが服を着るとすぐ、老人はちょっとした説明のようなものをしてくれたが、その説明は若干の当惑と、それにぼくが思うに、深い悲しみをあらわしていた。彼はぼくの肩を軽くたたき、勇気と忍耐をもつように言った。(…)

(…) ぼくは死ぬだろうと言われたわけではなかった。それどころか、医師は、恢復と希望という言葉を口にした。だがそれにたいして、ぼく自身の心の中のもっとも明晰な部分は、医者が口にする希望という言葉はただ単に不吉なだけだと応答していた。人が希望という言葉を使うのは、危険にさらされた人間にたいしてだけだ。絶望が目に見えるときに、人は希望という言葉を口にするのである」(pp.281-282)。

さいごの、「人が希望という言葉を使うのは、危険にさらされた人間にたいしてだけだ。絶望が目に見えるときに、人は希望という言葉を口にするのである」という文からわかるように、マニュエルはブラール医師の診断のあと、も

しくは、医師から希望をもつように励まされたあと、自分の病いが危険な状態にあると判断している。この判断は、自分がやがて死ぬであろうという思いと表裏をなしている。ブラール医師を訪れてから、マニュエルはますます自らの死を意識するようになるのである。このことは、第二部第五章の冒頭の文章からもたしかめることができる。マニュエルはエルネスト氏の店での勤めをやめたあとの数週間をかえりみて、こう言っている。

「ぼくがよろこびを知ったことがあるとすれば、それは続く数週間のことだったような気がする。しかもそれは、死ぬことの恐ろしい不安が、もはやほとんどぼくの心を離れなかったにもかかわらず、であった。苦しんだことのない人びとには、これらの言葉は理解しがたいものに思われるかもしれない。しかしぼくは内心に生にたいしての熾烈な欲望をかかえていたので、ほんのわずかのあいだの幸福でさえ、窒息と苦悶の時間の埋めあわせをしてくれるのだった」(p.287)。

ここでは、闘病生活においてマニュエルがあじわった、生きることのよろこび、幸福感がもんだいにされている。けれども、このよろこび、幸福感は、「死ぬことの恐ろしい不安」(une terrible appréhension de mourir) のただなかで、「窒息」(suffocation) や「苦悶」(angoisse) の長い時間の途中で、瞬間的・例外的に体験されるものにすぎない。マニュエルは闘病生活に入ってからは、基本的には死へのはげしい不安または死の恐怖にとりつかれて生きることになるのである。

c．マニュエルの信仰的立場

マニュエルの死の恐怖と関連して、彼の信仰的立場を明らかにしておきたい。マニュエルの純粋志向を論じたときに指摘したように、彼は欲望の人間になる前に、熱烈なカトリックの信仰をもつ宗教的人間であった。では、物語が始まった時点、あるいは、彼が手記を書いている時点においてはどうなのか。もちろん、マニュエルは、「カトリックの迷信」(Ⅱ－5、p.298) という言い方をしているところからもわかるように、カトリックの信仰と訣別している。それゆえ、私たちは先に、現在の彼が信仰をもたないと断定した。だが、必ずしもそうとばかりは言い切れないのだ。というのも、マニュエルは第二部第五章において、自らの宗教的態度の変化にふれて、「キリスト教徒となることによって、ぼくはカトリック教徒であることをやめた」(p.290) と語っているからだ。この規定は、マニュエルの信仰的立場というよりも、ジャック・プチが言うように、作者グリーンじしんの、作品執筆当時の信仰的立場を、「幾分簡潔に要約し」[81]たものとうけとることができる。だが、マニュエルがこのように言って

いる以上、彼が依然としてキリスト教信仰を自分なりの仕方で保持していることを一応認めなければならないのである。

いったい、マニュエルのキリスト教信仰とはいかなるものなのであろうか。この点にかんしては、マニュエルが死の恐怖とのかかわりで、「重要なのは、もはや神が存在するかどうかではなく、夜を無事すごせるかどうか、ということだった」(Ⅱ－5、p.290) と述べているところが考察の手がかりをまず与えてくれる。マニュエルの信仰は神の存在の問題とかかわっていない。このことは、『在り得たこと』の中で、ネーグルテールの城の教会堂における儀式に参列し、その儀式が終わったとき、マニュエルが次のように考えているところからもたしかめることができる。

「神よ、とぼくは出口に向かいながら考えるのだった。ぼくはあなたに祈りをささげることができない。しかし少なくとも正直な人間の心から発せられる言葉を受け入れたまえ。ぼくはあなたを否認する」(*Ce qui*、p.328)。

ここでは、「神よ」(Mon Dieu) と呼びかけられて、さいごに「ぼくはあなたを否認する」(je te renie) と断言されていることが注意をひく。『在り得たこと』を作成しているとき、マニュエルは神を否認しさえもするのである。「ぼくはあなたを否認する」という言葉は、たとえ神が存在するとしても、神によって救われるとか、神の愛を希求するといったことを自分は断固として拒絶するといった意味あいを含んでいるだろう。マニュエルの信仰は、神または神の存在とは無縁のところにあるのである。

マニュエルは復活すなわち生命の蘇りを信じているのだろうか。答えは否定的にならざるをえない。なぜならマニュエルは神を否認し、神に自己をゆだねることを拒否しているのだから。『在り得たこと』において、マニュエルはこう書くに至っている。

「カトリックの遺産を捨て去ることによって、ぼくは永遠に消滅することへの期待の中に、奇妙な慰めをみいだしていた。再生するという観念は、ぼくを疲れさせたし、おびえさせたりもした。あるいは、新たな生に蘇らなければならないとしても、弱まった意識で蘇りたかったし、苦しむことなく呼吸し、日の光がぼくの目を傷つけることのない仄暗い大寺院の列柱のあいだを、飽きることなく動きまわることを許してほしいものだと、ぼくはつつましく願うのであった」(p.352)。

マニュエルは「永遠に消滅することへの期待」をいだいている。ということはすなわち、彼は復活への望みをもっていないことになる。それどころかマニュエルは、「再生するという観念は、ぼくを疲れさせたし、おびえさせたりもし

た」とさえ言っている。マニュエルは再生することに恐怖すらおぼえている。この恐怖は、地上での彼の生活が苦悩にみちたものであり、同じような人生を彼が繰りかえして生きたくないと思っていることとかかわっている。また、マニュエルは「新たな生に蘇」ったとき、「苦しむことなく呼吸」し、「仄暗い大寺院の列柱のあいだを、飽きることなく動きまわる」ことを願っている[82]。この願いも、地上での生活が苦渋にみちたものであることに立脚している。こうした恐怖、願いと、正統のキリスト者たちの復活信仰とのあいだには相当なへだたりがある。端的に言って、彼らの復活信仰は神の国＝天国で再生することへの願いから成り立っていて、神による救済を前提としている。これにたいして、マニュエルは神を否認しているので、楽園で生きるという発想・願いをいささかも持ち合わせていない。だからこそ、再生への恐怖が生じるのである。それにマニュエルは、「新たな生に蘇らなければならないとしても」という譲歩の表現からうかがえるように、生命の蘇りを全面的に信じているわけではない。マニュエルは正統のキリスト者の復活信仰を有していないとみなされるのである。

マニュエルは何を信じ、なにゆえに自らをキリスト教徒とみなしているのであろうか。このことに関連して、マニュエルがエルネスト・ルナンの『イエス伝』の愛読者であることは指摘しておく必要があるだろう。作中、マニュエルが『イエス伝』を読む場面は三度出てくる。第一部第六章で、「マニュエルは(…) 我が家では信仰の書とみなされていた『イエス伝』の読書に没頭するのだった」(p.239) と描写され、第一部第十章では、「わたしは小型円テーブルの上にある『イエス伝』を手にとって、でたらめに本をひらき、マニュエルの前にひろげて置いた。習慣が若者に作用をおよぼして、一瞬平静さを彼にもたらした」(p.249) と語られている。そして第二部第二章において、「ぼくは暖炉のそばのいつもの席について、いつものルナンの本の頁をめくっていた。(…) ぼくは読んでいる最中の『イエス伝』を膝の上に置いた」(pp.271-272) と言われることで、マニュエルの読む『イエス伝』がルナンのものであることがわかるのである。

ところで、ルナンの『イエス伝』は周知のように、イエスを神の子ではなく、徹頭徹尾人間としてあつかった作品であり、そこでは、イエスの神性は完全に否定されている。そのため、この作品は教会関係者ら多くの人びとの非難をまねいた。グリーンも『幻を追う人』執筆に着手した1932年6月当時、ルナンの『イエス伝』を批判的に読んでいる。グリーンは1932年6月4日付の『日記』

の中で、「昨晩、イエスの歴史に、教会のイエスではなく人間としてのイエスの歴史にとても心を奪われた。イエスのことを神聖な人格として考えるのをやめたときから、人はめちゃめちゃになるのだ」[83] と書き、また、6月13日には次のように述べている。

「『イエス伝』を再読。私は、ルナンがキリストを《魅力的な医者》と呼ぶことを容認することができない。(…) 彼はわれわれをキリストに近づけるのではなく、キリストをわれわれに近づけようとした。彼はキリストを愛想のよい哲学者にしようとすることで、キリストを辱めてしまった。そして彼はキリストにわれわれが近づけるようにするために、キリストをわれわれの背丈に縮めてしまった」[84]。

グリーンは、ルナンがイエス・キリストから神性をとり除き、キリストを人間化したことを批判している。引用文全体からは、イエス・キリストを人間的な次元でとらえることへのグリーンの強い反撥が看取される。こうしたルナン批判は、1932年当時のグリーンの信仰的立場をかいま見せているかもしれない。当時、グリーンはカトリック教会と絶縁し、ありとあらゆる宗教的実践を放棄していた。とはいえ、イエス・キリストの神性そのものは疑っていなかったといえよう。イエス・キリストの神性を信じるという、キリスト者の根本的な信仰は相変わらず保持していたと推測されるのである。

『幻を追う人』のマニュエルは、イエス・キリストをどのような存在とみなしているのであろうか。作中、マニュエルがルナンの『イエス伝』についてどう考えているか、ということを明確に示す記述はない。けれども、結論を先取りして言えば、マニュエルは作者グリーンとはちがって、ルナンの『イエス伝』の内容に沿ったかたちで、イエス・キリストを認識しているのではないだろうか。このことを明らかにするために、マニュエルがイエス・キリストに思いをはせているところをみていくことにしよう。マニュエルのイエスへの思いはまず、第二部第二章においてみいだされる。マニュエルは、病いの床にふせったあと、ふたたびエルネスト氏の店に勤めに出た日のことを、こうふりかえっている。

「翌日、六時に、ぼくはまだ人けのない市場の広場を横ぎり、店のなかに入っていった。何とも不快な悪臭がぼくの嗅覚をとらえた。というのも、いつものように、便所のドアがあいたままになっていたからだ。ぼくはドアを閉めに行った。あるいは閉めようとした。それからまた店を出て、石段の上にすわって、両手に顔をうずめた。《このような場合、〈人の子〉[85] ならいったいどうしただろうか》と、ぼくは絶望にかられて自問するのだった。矜恃の念だけが、涙を流すのをくいとめていた。ぼくは店にもどり、店の奥から箒を

持ってくると、息をとめようとしながら床の上を掃くのだった」(p.272)。

マニュエルは、便所から発散する「何とも不快な悪臭」をかぎながら、換言すれば、みじめな状況に置かれて、「人の子」(le Fils de l'Homme) に思いをはせている。「人の子」とは言うまでもなくイエス・キリストのことである。イエス・キリストはマニュエルの意識をかなり支配する存在であるのだ。マニュエルにおいて、イエスとは、交流と連帯を希求する対象としての他者なのであろう。だからこそ、マニュエルは自らをキリスト教徒と称するのだと思われる。また、上の一節で、マニュエルがみじめな状況のなかでイエスのことを考えているという事実は、注目に値いする。マニュエルはイエスの境遇を、自らの悲惨な境遇と照らし合わせて考えている。マニュエルのイエスとは、栄光の中で生きた神の子としてのイエスではなく、悲惨の中で、人間として生きたイエスなのである。マニュエルは、エルネスト氏の店での勤めをやめて闘病生活に専念しはじめたころをかえりみながら、以下のごとく書いている。

「成功すること、それはおそらくキリストに似ることなのであろう。それも、《油虫》[86] やひれ伏した尼さんたちのキリストではない。そんなキリストなど、ぼくにはヘルメスやアポロンと同じくらい不可解なものでありつづけた。そうではなく、ぼくの考えるキリストとは、その言葉で人びとの魂を魅惑した、勇敢で善良な小男のことだ。幼年時代からぼくは彼を愛していた。夜の静寂の中で、彼のことを考えるために目をさますことがあった。このものやあのものをねだりたく思う生きた人間のことを考えるように。彼のみがぼくを理解することができ、ぼくに助言を与えることができるのだと、ぼくは痛切に感じたものだ。しかしぼくは、彼の中に超自然的な存在をみることはできなかった。(…) 教会の奥の、香がけむり、蠟燭の火がきらめくところには、人がラテン語でしか話しかけず、またぼくが自分の無知な心をおずおずとその方に向かって高揚させようとした、一人の絶対君主がいた。《さあ、あの方なんだ、あの方なんだ》といくら自分に言いきかせても無駄だった。彼の豪奢さがぼくを気づまりにした。ぼくは祈った。(…) しかしぼくが小声でとなえる言葉は真心からのものではなかった。ぼくはできることなら一人の友だちに、一人の兄に話しかけたかった。ぼくは神に話しかけるすべを知らなかった」(Ⅱ－5、p.290)。

ここでは、「幼年時代からぼくは彼を愛していた」という一文から明らかなように、イエス・キリストへの愛が鮮明に表白されている。しかしながら、マニュエルが愛する、もしくは愛していたキリストは、「彼のことを考えるために目をさますことがあった。(…) 生きた人間のことを考えるように」と言われているごとく、あくまで人間としてのキリストである。「ぼくは、彼の中に超自然的な存在をみることはできなかった」という述懐は、マニュエルのキリ

ストが神性（divinité）を欠いていることを証(あか)している。このことは、教会のキリストがマニュエルにとって「絶対君主」でしかなく、教会のキリストにたいして真の祈りをささげることができなかったことからも察知することができる。そしてさいごの、「ぼくはできることなら一人の友だちに、一人の兄に話しかけたかった。ぼくは神に話しかけるすべを知らなかった」という告白からは、マニュエルのキリストが神ではなく、自分と同じように人生の苦難をあじわった一人の人間であり、「友だち」「兄」という言葉が示すように、人間の能力の限界を越えない、あくまで自己と同等の次元の存在であることがわかるのである。このようにマニュエルはキリストを愛しつつも、キリストの神性を認めない。正統のキリスト教信仰は、イエス・キリストの神性を信じることから出発する。したがって、マニュエルは正統的なキリスト者ではない。マニュエルもまた、そのことを十二分に承知している。マニュエルはすでに引用したように、「キリスト教徒となることによって、ぼくはカトリック教徒であることをやめた」と言う一方で、自分の中に宿る「無信仰への意志」をもんだいにし、次のように説明している。

「もしもぼくの心に、周囲で話されているあのキリスト教信仰がほんのわずかでもあったならば、ぼくは超自然的な存在を信じたことだろう。だがこの種の感情にたいしては、ぼくはたたかう用意ができていた。ちょうど人が堕落への誘惑にたいしてたたかうように。どこから生じたのかはわからない力がぼくの内心で、この無信仰への意志を助長していた。(…) 祭りの中で十字架の光で輝く、あのつつましやかで、かつ光栄あるキリストにたいして、ぼくはもはや何も言うことはなかった。いまやぼくのまなざしは、未知なるキリストに向かっていた。家族や群衆にさからい、自らの力をもち、その人間性によって偉大だったキリストに。(…) 言葉なしですますことのできる彼の地味な勇敢さ、屈服することのない彼の意志、何事にも反対する彼の本能、確立された秩序を打ち破った彼の忍耐、平和を愛するが、この不服従の人のありとあらゆる人間的性質を、ぼくはうらやんでいた。何という巧妙さで、教会は彼を神とすることによって自家薬籠中のものとしてしまったかを、ぼくは知りすぎるほど知っていた」（Ⅱ－5、p.306）。

この一節では、「もしもぼくの心に、(…) あのキリスト教信仰がほんのわずかでもあったならば」（si j'avais eu au cœur un peu de cette foi chrétienne）という非現実の仮定の文を立てているところから明白なように、マニュエルはキリスト教信仰をもたない人間として語っている。マニュエルのキリストは十字架上の「つつましやかで、かつ光栄ある」キリストではなく、「その人間性によって偉大だった」キリストであり、「ありとあらゆる人間的性

質」をそなえたキリストである。要するに人間としてのキリストである[87]。さいごの、「何という巧妙さで、教会は彼を神とすることによって自家薬籠中のものとしてしまったか」という見解からわかるように、マニュエルはイエスを神格化することを非難し、拒否している。これが、マニュエルの言うところの「無信仰への意志」なのである。結局、イエス・キリストの神性を信じないという点で、マニュエルはキリスト教徒ではないともみなしうる。マニュエルのイエス像は、ルナンが『イエス伝』の中で探求したイエス像に近いものと思われる。作者グリーンとはことなり、マニュエルはルナンのキリスト理解を批判的にうけとめるのではなく、そのままうけ入れていると考えられるのである。

イエス・キリストを神的存在としてではなく、人間存在として愛するとき、そのイエス信仰はもはや宗教的なものではなくなる。ミシェール・ラクロがマニュエルのイエス探求を評して、「彼が、生きた人間としてのイエスに近づいたと感じれば感じるほど、ますます彼はカトリックの宗教から遠去かることになるのだ」[88]と言っているのも、こうした事情を踏まえてのことだと思われる。そしてイエスを人間としてとらえ、宗教から遠去かることによって、マニュエルは当然のことながら、死の問題と一人で対峙しなければならなくなる。マニュエルは死の恐怖と宗教との関係について、こう述べている。

「ぼくは一度ならず気づいていた、死と隣り合わせにあるとき、どれだけ宗教が価値のないものであるかを。魂と来世について教えられた一切のことは、ぼくを待ちうけている恐ろしい現実に比べれば、ばかげたごまかしのように思われた。そしてぼくが覚えたお祈りは、死ぬことの恐怖にたいしてなんの救いにもならなかった。ぼくは額の汗をぬぐうために、顔の上にシーツの端をひき寄せるのだった。ああ、誰かが来てくれたら！　しかしこうした瞬間にぼくは一人きりだった」（Ⅱ－５、p.290）。

マニュエルは「死ぬことの恐怖」をもんだいにし、この恐怖を前にして宗教がまったく救いの手をさしのべてくれなかったことを語っている。神を否認し、キリスト者の復活信仰をもたず、イエス・キリストの神性も信じないマニュエルの信仰的立場を考慮するとき、マニュエルがひとりで死と立ち向かわなければならなくなることは必然的結果である。死はマニュエルにとって「恐ろしい現実」でしかありえないし、「こうした瞬間にぼくは一人きりだった」と書いているように、マニュエルは孤独の中で死の恐怖とたたかわなければならなくなるのだ。それゆえ、マニュエルにおいて、『在り得たこと』の作成は、自分を責めさいなむ死の恐怖とも深くかかわることになるのである。

## 註

70) 目次の１．に該当する部分は、『「幻を追う人」読解のこころみ(1)』、山口大学「文学会志」第46巻、1995、pp.58-71を、２．の(1)(2)にあたる部分は、『「幻を追う人」読解のこころみ(2)』、山口大学「独仏文学」第18号、1996、pp.97-112を、２．の(3)は、『「幻を追う人」読解のこころみ(3)』、同「文学会志」第47巻、1996、pp.21-38を、２．の(4)(5)は、『「幻を追う人」読解のこころみ(4)』、同「独仏文学」第19号、1997、pp.1-18を、３．の(1)(2)は、『「幻を追う人」読解のこころみ(5)』、「文学会志」第48巻、1997、pp.113-128を参照。

71) マリー＝テレーズは、自分のせいでマニュエルが病気になったと考え、不安感にかられて、夜の散歩の一件をガロ神父に告解する。作品の構成と概要を紹介したときに述べたように、ガロ神父はこの一件を母親のプラス夫人に話すよう、マリー＝テレーズに約束させる。

72) 鈴木覚：『フランス語動詞時称体系再考（続）』、愛知県立大学外国語学部「紀要」第13号、1980、p.72、および、矢野正俊：『フランス語動詞時称体系試論』、静岡大学教養部「研究報告」第Ｉ部、第16巻第２号、1980、p.94を参照。

73) マニュエルは病いにたおれたころを思い出しながら、「ともかく、ぼくの病気が事態をうまく解決してくれた。ぼくにはいかなる質問もなされなかった」（Ⅱ－２、p.269）と語っている。

74) エルネスト氏の店をやめて、闘病生活に入った時点から、森の散歩に出かける時点まで、どれくらいのへだたりがあるかについての正確な記述は、作中みられない。

75) マニュエルは闘病生活に入ってから、マドモアゼル・ベルトを訪問している。その折、マドモアゼル・ベルトは、「それから、町であまり姿を人にみられないようになさいよ」（Ⅱ－５、p.292）とマニュエルに言っている。この謎めいた言葉も、サンクティス神父の言葉と同様に、夜の散歩の一件が町の人びとに知られていることを匂わせたものであるように思われる。

76) ジョルジュ・エスパンシャ氏は隣りの県の県庁所在地に住んでいる（Ⅱ－５、p.300）。

77)「譫言を言う」と訳した動詞délirerは、「精神が錯乱する」という意味もある。

78) Jacques Petit: 《Notes》 pour *Le Visionnaire*, in *Julien Green*, *Œuvres complètes*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, t.II, p.1407.

79) *Léviathan*, I, p.766.

80) *Le Malfaiteur*, Ⅲ, p.202.

81) Jacques Petit: 《Notes》 pour *Le Visionnaire*, p.1413.

82) グリーンは1932年12月２日付の『日記』の中で、「時とともに、またよく考えるにつれて、

私は、死の中に、私たちが苦しみなしに入って行くはずの暗い大寺院しか見なくなるに至った」(*Les Années faciles, Journal I*, Ⅳ, p.210) と書いている。マニュエルの願いは作者グリーンのこうした認識を反映しているだろう。

83) *Les Années faciles*, p.175

84) *Les Années faciles*, p.177

85) カッコ (〈　〉) は大文字で書きはじめられていることを示す。

86)「油虫」(blattes) とは、神学校の若者たちにつけられた渾名である (Ⅱ－2、p.273)。

87) Marc Eigeldingerはマニュエルのイエス像を次のように説明している：「《幻を追う人》であるマニュエルは、キリストを《生きた人間》のようにみなしている。彼はキリストから、その神的・超自然的な本性をうばい、キリストをわれわれの内心とこの世に人間的に現存する存在にしてしまっている」(*Julien Green et la tentation de l'irréel*, Aux Portes de France, 1947, p.68)。Marc Eigeldingerもまた、マニュエルにとってのキリストが神的・超自然的な存在としてのキリストではなく、人間存在としてのキリストであることを指摘している。

88) Michèle Raclot: *Le sens du mystère dans l'oeuvre romanesque de Julien Green*, Aux Amateurs de livres, 1988, t.Ⅱ, p.797.